

第2回

トウモロコシは儲かるか
～コメとの比較結果～

山口大学創成科学研究科農学系専攻
農業市場学研究室修士1年 橋本 美奈
同准教授 種市 豊



山口市初の子実トウモロコシ収穫実演会、クボタのコンバインと著者

山口市の子実トウモロコシ試験の初年度の実績はどうだったのか。作業時間と時間当たり収入を中心に、コメと比較した結果を報告する。

作業時間は10分の1
時間収入は3倍以上

今回は2017年度の山口市子実トウモロコシ栽培実証試験の結果について報告したい。内容は昨年9月1日に山口市主催の農業セミナー「更なる農業所得向上を目指して」山口市内の水田を活用した飼料用トウモロコシ生産の取り組み紹介」で発表したものである。

(株)農園屋五葉(山根正之代表取締役)の試験栽培区27aについて、作業時間、時間当たりの収入をコメと比較調査した。

子実トウモロコシの合計の作業時間は11時間で、10a当たりに換算すると約4時間であった。内訳は、元肥散布45分、圃場準備・播種と除草剤散布にそれぞれ90分、収穫に20分。これは10aのコメ生産にかかる投下労働時間34時間(農水省「米生産費調査」経営規模0.5~1haの場合)の約10分の1である。コメと比べていかに労働時間が少ないかわかる。「こんな手間のかからない作物は初めて。畑準備して、種まいて、除草剤ふって終わり」と生産に取り組んだ山根氏もその実感を話す。

では、時間当たりの収入はコメと比べてどうか。1時間当たりの収入は1万1622円となった。これはコメの同3391円(農水省「農業経営統計調査」経営規模0.5~1haの場合)の3倍以上である。

算出方法は以下のとおりだ。10a当たりの収入は商品代金1万1488円に加え、助成金(水田活用の直接支払交付金)3万5000円と合わせて4万6488円。これを作業時間4時間で割ると1万1622円となる。商品代金については、「トウモロコシの販売キロ単価(乾燥後)32円×10a当たり収量359kg」で計算した。

収入について山根氏は、「収量はまだまだ伸ばせる」と語る。その理由も明確だ。「今回、隣の水田から漏水してきた畔に近い箇所は生育が悪く、収量がほとんどなかった。一方、水がこなかった圃場の中央部の生育はよく、収量を推定したところ、500~600kgはあった。来年は隣の水田もトウモロコシをつくる予定なので、湿害は防げる」

こうした改善の結果、仮に収量が500kgになれば、10a当たりの収入5万1000円、時間当たりの収



「こんな楽な作物は初めて」と語る山根正之氏

入1万2750円となる。山根氏は「土づくりや作業の改善によって、将来的には反収1tを目指したい」と抱負を語る。

また、単価32円についても、大幅な改善が可能である。初年度は最低水準として、試験に参加した酪農家を利用しての配合飼料メーカーの輸入トウモロコシ価格に合わせた。これは米国産の遺伝子組み換えトウモロコシ価格だが、山口市産ノンGM(非遺伝子組み換え)トウモロコシに価値を見出す需要家が見つれば、価格帯としては45円(先進経営体である「北海道子実コーン組合」の基本価格)と同程度かそれ以上を見込めるだろう。

次にコスト面をみていこう。10a当たり2万1650円で内訳は、種子代4800円、農薬代4850円、肥料代1万2000円となった。

最後に収益性を報告する。収入(4万6488円)からコスト(2万1

650円)を引いた収益は2万4838円となった。1時間当たりの収益は6210円となる(注・圃場準備から播種、収穫まで(株)中四国クボタの協力を得たため、その分の機械償却費がかかっていない)。これはコメの農業所得1285円(農水省「農業経営統計調査」経営規模1〜2haの場合)と比較すると、約5倍となった。

以上のとおり、作業時間、時間当たり収入、収益すべての面において、子実トウモロコシはコメを上回る結果となった。

5名の新規生産者が 実証試験に参加

こうした17年度の山根氏の成果を受け、18年度から5名の新規生産者が実証試験に参加することとなった。彼らの思いを聞いてみた。

(農)杵崎の里理事 野島義正氏

杵崎の里では、農作物の栽培だけ



野島義正氏



中村司氏



三輪利夫氏



藤村敏浩氏



中戸茂盛氏

でなく肉牛の放牧を行なっています。ちょうど飼料を自給して、「エサから山口市産」の牛肉としてブランド力を高めたいと考えていました。そのようななかで、国産子実トウモロコシの存在を知り、この事業への参画を決めました。今後は、地産地消のメリットを活かし、より良い六次産業化にも繋げていきたいと思っています。

(農)浜田理事 中村司氏

水田周辺の水まわりが不便で悩んでいたところ、子実トウモロコシの話聞いて導入してみたいと考えました。子実トウモロコシの作業時間が短い点についても期待しており、今後、周辺の耕作放棄地を預かり、規模拡大を目指していくにあたって、作業の省力化は重要な課題だと思っています。今回プラウ耕を初めて行ない、自分の圃場がどういう状態なのかを把握できたことも収穫でした。

ファーム三輪代表 三輪利夫氏

2009年から飼料用米を栽培していますが、食生活の変化や国産の安心安全な飼料について考えたときに、より持続的で将来性のある作物として子実トウモロコシに関心を持ちました。今後も需要をきちんと捉えた生産をしていきたいと考えています。実際に子実トウモロコシを栽培してみても、その手間の少なさに驚いたと同時に大きな手ごたえを感じました。

藤村農園代表 藤村敏浩氏

今回、子実トウモロコシを栽培している圃場は、もともと水田ではなかったため、水田利用に対する補助金はもらえません。しかし、野菜の輪作体系にトウモロコシを組み込むことで、連作による問題を防ぎ、土地を休ませ地力を回復するねらいがあります。今回は(株)秋川牧園さんと契約して、無農薬栽培を行なっている

るので、どこまでやれるのか挑戦中です。

(株)仙人の里代表取締役 中戸茂盛氏

所有している圃場のうち、2枚ほど水が抜けやすい水田があったことと、耕作放棄地を預かり規模を拡大していくにあたって、もっと省力化に努めたいと考えていたことが、子実トウモロコシ栽培を始めたきっかけです。また、収量が下がっていた大豆を含め、作付けを見直したいという思いもありました。今回、トウモロコシの作付けを行なった圃場周辺の水田のうち、2〜3割が耕作放棄地となっており、そこに一作でも入れることで圃場が荒れることを防ぐねらいもあります。(続く)

●訂正とお詫び 前号P22本文冒頭「2017年の生産面積27a」↓正しくは「58a」、続く「今年10倍に拡大」↓正しくは「約5倍に拡大」です。訂正してお詫びします。